

SKIPシティ国際Dシネマ映画祭 2020

中山 秀一

2020年 授賞式当日のSKIPシティ広場



初の試み オンラインによる映画祭

今年で第17回を迎えた「SKIPシティ国際Dシネマ映画祭」は、予定のオリンピックに配慮し、例年の7月を先送りして、9月26日(土)から10月4日(日)まで開催された。しかも、コロナの影響で、最終日の表彰式以外はすべて、オンライン方式で行われた。

開催に先立って、8月31日15時より、恒例の記者発表がSKIPシティの映像ホールから、Zoomによる生中継方式で行われた。ノミネート作品の発表、主催者側関係者の挨拶などが放送され、オンラインで参加したプレス関係者からの質問に応じた。

今年のコンペティション作品は、日本を含め世界106の国と地域から1,169本の応募があり、国と地域、作品数ともに過去最高であったことが報告された。

その膨大な応募作品から、国際コンペティション部門の長編10作品、国内コンペティション長編部門の5作品と、短編部門の9作品がノミネートされたことが発表された。今年の特長としては、国際コンペティシ

ョン部門に、長編ドキュメンタリーが2本ノミネートされた事、日本の長編作品『写真の女』が、敢えて国際部門にノミネートされた事があげられる。

国内コンペティションの長編部門では、昨年『ミは未来のミ』で、本映画祭のSKIPシティアワードを受賞した磯部鉄平監督が、新作『コーンフレーク』で、3年連続のノミネートを果たしたことが特筆される。

国内コンペティション短編部門では、是枝裕和監督、篠崎誠監督が指導に当たる、早稲田大学基幹理工学部の映像制作実習で制作された『ななめの食卓』が注目される。

この、8月31日の記者発表が終わると、翌9月26日の映画祭初日には、特にオープニングセレモニーはなく、10月4日の表彰式まで9日間、ネット配信によるコンペ作品の上映が行われる。映画祭への参加者は、スクリーンではなく、もっぱらパソコンの画面かテレビに映した画面で、今年映画祭の作品を鑑賞することになる。

そして最終日の10月4日はリモートではなく、SKIPシティの映像ホールで、例年どおり人間が集まって授賞式が行われる、

というスケジュールだ。

映画祭の作品をネット配信で鑑賞する

肝心のノミネート作品の鑑賞はどうか、それは動画配信サイト「シネマディスクパリーズ」にログインして鑑賞するスタイルだ。

映画祭当局が、この配信サイトと契約しており、国際コンペティション、国内コンペティションすべてのノミネート作品24本が、自宅のパソコンで鑑賞することができるという方式になっている。

映画祭への参加希望者は、料金を納めてログインすると、作品の目次がスチル写真で表示されるので、観たい作品をクリックする方式だ。そしてその料金は、長編が300円、短篇が100円、24作品全て観放題が1,480円である。これは今年のオンライン映画祭の特別料金で、例年のような、スクリーン鑑賞のチケットに比べてもかなり安い。

なお「この配信サイト《シネマディスクパリーズ》は、2020年4月より開始した定額制の映画配信サービスである。インデペンデント映画をメインにミニシアター系映画を取り扱いながら、作り手にスポットライトを当てたコンテンツを豊富に揃えている。」とプレス資料で紹介されている。

配信サイトで映画観賞 その実感は

筆者にとって、映画をWeb配信サイトで観るのは、今回が初めてだ。アマゾンのプライム会員なので、アマゾンが配信している映画は観放題なのだが、まだ一度も見たことがないし、Netflixとも契約していない。

名画のDVDは多く持っているが、65インチの大型テレビで観ている。つまり、映画は映画館に行って大型スクリーンで観る



記者発表は Zoom による中継方式で映像ホールから放送

ことに決めているからだ。

長年取材を続けている SKIP シティ映画祭は、2004 年からスタートしているが、筆者はその翌年 2005 年から取材を続けているので、今年で 15 年目になる。

この長い間で、今回のように参加者が集まることなく、ネット配信でコンペ作品をオフィスや自宅で個々に観る、というのは考えもしなかったことだ。

パソコン画面に表示されるノミネート作品のメニューから、観たい作品の写真をクリックすると、再生が始まる。この配信サイト「シネマディスカバリーズ」の上映画面は、大変便利にデザインされている。

～実際の画面は～

基本的には YouTube と同じで、画面下に再生進行の時間を示すバーがあり、画面の右隅には「フル HD」などの映像の画質を選択する文字がある。

ただし、YouTube などには見られない、最も特筆すべき機能がある。画面の中央にカーソルを当てると、左右を指す大きな三角のマークが示される。左向きをクリックすると、10 秒前に戻る、右向きをクリックすると 10 秒先に進む、というアイデアで、二つの三角の間には、プレイとポーズのマークがある。

筆者は初めて、この機能付で作品の鑑賞をしたのだが、記事を書くときには、ちょっと戻して確認したいところがあるものだ。そのためには最適な機能だと思った次第だ。スクリーン試写では、ちょっと今のところを戻して観たいのですが…などはあり得ないことだ。

ノミネート作品の規約

この映画祭のコンペ部門は、「国際コンペティション」と「国内コンペティション」の大枠 2 本立てだ。国内コンペティションは、さらに長編部門と短篇部門に分かれており、全体では 2 枠 3 部門となっている。

従って日本作品の長編は「国際コンペティション」にも、「国内」の長編部門にもノミネートが可能である。「国際」の舞台に出すか、「国内」の土俵で勝負させるかの選択は、映画祭当局が決める。

なお、監督の応募経験は 3 作目までとなっ

ており、古手監督のノミネートが限定されているので、若手監督のデビューがしやすく配慮されている。

なお、アニメ作品は、その長さや力量に応じて、どの部門にも応募することができる。因みに今年のノミネートには、アニメ作品はなかった。

今年のノミネート作品の特長

今年の内容を見ると、国際ノミネート作品 10 本のうち 3 本が女性監督で、そのうち 2 名の女性監督が、『願い』と『ザ・ペンシル』で受賞している。つまり受賞 4 作品のうち 2 本が女性監督で、半数を占めており、女性監督の打率が抜群に向上している。しかし将来は、特に女性を意識する時代ではなくなるのは、映画界だけでなく一般社会でも同様だろう。

また内容的には、ドキュメンタリーが 2 本ノミネートされたのが興味深い。1 本は『リル・バック / メンフィスの白鳥』で、2017 年ユニクロの CM でも話題となったダンサー、リル・バックの半生を追いかけた実写作品。

もう 1 本は、『戦場カメラマン ヤン・グラルupp の記録』、世界的に著名な戦場カメラマン、ヤン・グラルupp とともにイラクのモスルに赴き、イラク軍と ISIS (イスラム国) の紛争を撮影する。帰宅時には、シングルファーザーとして、子育てに奮闘する彼の人間性を描いている。作品中、戦場カメラマンが撮影した印象深い、モノクロのスチル写真が多く紹介される。

そして、筆者の最もお気に入りには『ザ・ペンシル』だ。ロシア北部の片田舎にやって来た、美術を教える女性教師アントニーナが、教室でのさばるヤクザの生徒と対峙する物語。

そこには、ロシア民衆の伝統とも言える「長いものには巻かれる」の風土、さらには、皇帝、農奴、搾取、ウオッカ、極寒、革命、エリートシン、などのキーワードを思い出させる。

クローージングセレモニー (授賞式)

例年だと休日には、家族向けのイベントなどが開催され、屋台なども出てお祭り気分いっぱい広場が映画祭を盛り上げたの



10月4日の日曜、映像ホール入口の広場は閑散



入口で体温のチェック、手の殺菌を受ける

だが、今年は閑散としている。

映画祭最終日の授賞式は、10月4日の日曜日に、リモートではなく、従来のリアル方式で行われた。

会場には抽選による 100 名のファンが招待されて、コロナ禍ではあるが、会場の雰囲気は映画祭らしくなった。なお、この授賞式は、YouTube で同時生中継も行われた。

国際コンペ作品の監督や関係者たち、国際国内の審査員はすべて来場せず、スクリーン上のビデオメッセージによるリモートで行われた。

一方、国内コンペ作品の関係者たちは、リモートではなくリアル人間が参加して、ステージに立った。授賞作品発表の際には、壇上の受賞者に、客席のファンたちから声援が飛び交って、共に喜び合い、映画祭らしい雰囲気が盛り上がった。

国際コンペの静かさの後に、国内コンペの賑やかな声援、その対比を見ると、やはり、映画祭はお祭りなのだ！との思いを強くした瞬間であった。



国内コンペの関係者たちは、全員生身で参加登壇して、客席の関係者と共に、コロナ禍も吹き飛ばすような元気をアピールした。



実行委員会会長 / 埼玉県知事の大野元裕氏が授賞式を前に挨拶。皆様のご支援ご協力を得て、新しい形での開催となりました。私自身もオンラインで、私が以前に6年以上住んでいたイラクを映像を見た時に、色がイラクだ、そして匂いがしてくる。自宅にいなからということが共有できる、そんな時代になったのだと思います。と、オンラインのメリットにも触れられた。

審査員のメンバー

審査員は、毎年新たなメンバーが委託される。国際コンペが4名、国内コンペが3名、映画関係の各分野で活躍している方から選ばれる。

《国際コンペティション》

〈審査委員長〉 * 澤田 正道 映画プロデューサー (フランス)

〈審査員〉 * 三島 有紀子 Yukiko MISHIMA 映画監督 (日本)

* ジュリアン・ロス Julian ROSS (イギリス、オランダ) ロッテルダム国際映画祭 / ロカルノ国際映画祭、プログラマー

* エスター・ヤン Esther YEUNG (香港) エドコ・フィルム社、配給セールス部門ディレクター

《国内コンペティション》

〈審査委員長〉 * 部谷 京子 Kyoko HEYA 美術監督 (日本)

〈審査員〉 * 沖田 修一 Shuichi OKITA 映画監督 (日本)

* アダム・トレル Adam TOREL サードウィンドフィルムズ社、代表 (イギリス、日本)



授賞式が終わって、国内コンペの受賞者たちが賞を手に、主催者側の関係者たちと壇上で記念撮影。

《授賞作品一覧》

《国際コンペティション》

最優秀作品賞 『願い』ノルウェー、スウェーデン 監督 マリア・セーダル

監督賞 『ザ・ペンシル』ロシア 監督 ナタリア・ナザロア

審査員特別賞 『ザ・ペンシル』ロシア 監督 ナタリア・ナザロア

観客賞 『南スーダンの闇と光』オーストラリア 監督 ベン・ローレンス

《国内コンペティション》

SKIP シティアワード 『写真の女』日本 監督 串田壮史

優秀作品賞 『コントラ』日本 監督 アンシュル・チョウハン

『stay』日本 監督 藤田直哉

観客賞 『コーンフレーク』日本 監督 磯部鉄平

『ムイト・プラゼール』日本 監督 朴正一

《澤田正道 国際コンペ審査委員長の総評》



受賞作品4本のうち2本が女性監督であった。この映画祭で改めて実感したのは、女性監督の作品がすでにしっかり根を張っ

てきているということ。近い将来、女性監督とか男性監督とかの言い回しは無くなるだろう。受賞作の1本は戦争映画だが、戦争というものを考えさせられた。今起きている戦争に、我々はどう接すべきか、このテーマを扱う際の責任と覚悟を改めて感じさせられた。

我々は今、商業的にはイベント性を持たない映画の公開が難しくなっている。そういう状況の中で、映画祭というものは、別の価値観から、純粋な映画を見せるという可能性を残していると思う。

今回は短い期間だったが、学べるものが多かったと感じている。この映画祭が未永く常に新しい発見の場であり続けるように願っている。(以上要約)

《国際コンペティションの受賞作品紹介》

『願い』:最優秀作品賞(ノルウェー、スウェーデン)



マリア・セーダル監督 受賞の挨拶

映画祭の観客の皆さん、ノルウェー作品『願い』の監督・脚本のマリア・セーダルです。

今朝、ノルウェーにある山小屋の自宅で目覚めると、日本からEメールが届いており、審査員の方々が、私の作品をグランプリ

りに選んでくださったことが書かれています。

今でも信じられない気持ちで、この素晴らしいニュースを大変光栄に思います。なぜなら、この物語は私のこれまでの作品の中でも、最も自伝的なものだからです。私の個人的な体験を、映画作品にするのは、非常にチャレンジングなことでした。

改めて、審査員の皆さまに感謝を申し上げます。大変勇気づけられました。最後に、皆さんが素晴らしいイブニングを迎えられますこと、そして、いつか皆様とお会いできますことを願っております。

〈グランプリ作品『願い』のストーリー〉



© Manuel Claro

マリア・セーダル監督は、末期の脳腫瘍を宣告され、生存率が極めて低い、難しい手術を受けることになった主婦と、その家族を描いている。

余命を宣告されて揺れ動く、やや複雑な家庭の妻の心情を、女性監督らしい視点で、きめ細かく心理描写しているのが特徴だ。一方、男性にとっては、妻がこのような余命宣告という、追い詰められた環境に置かれた場合の、複雑な心情を、この映画が改めて教えてくれる思いだ。

彼女の家庭はやや複雑で、6人の子供たちと、夫と彼女の実父が同居している9人家族だ。そして6人の子供のうち3人は彼女の養子で、あとの3人は夫の連れ子?のようだ。

そして彼女の仕事は、ダンスツアーの振付師。彼女の舞台が成功を収め、久しぶりに自宅へ戻った。そして彼女はクリスマスの前日に、末期の脳腫瘍という診断を受ける。

この映画は、この日からの彼女の心の動きと夫の行動と、残される家族への思いやりなどが描かれる。

現在の夫との出会いは、彼女が積極的だったようで、夫は前妻と離婚をして、今の妻の所に3人の子連れでやって来て、同棲生

活を続けているようだ。

彼女は死も覚悟した手術を前にして、改めて結婚式を挙げたいと、手ごろな教会を探し、簡素な結婚式を行う。手術をする病院にも結婚式場があり、牧師も居て薦められるが、彼女は病院内での挙式を断る。

9人家族だから、住んでいる家もかなり広い。日本では考えられないノルウェーの住宅事情だ。

いよいよ手術当日、手術室に運ばれるベッドには、手術着に包まれた妻が横たわっている。手術灯の下に止まったベッドには、すでに穏やかな表情の妻が…、ふと見ると、その横には同じように手術着を着た夫が、妻に寄り添うように横たわっている。ここで映画は暗転しておわりとなる。

印象的な映画だ。女性にとって、ウエディングドレスを着ることは、何歳になっても憧れのようだ。

『ザ・ペンシル』：監督賞・審査員特別賞 (ロシア)



ナタリア・ナザロフ監督 受賞の挨拶

映画祭の審査員、そして観客の皆様、この度は審査員特別賞を受賞し、たいへん光栄に思います。

映画祭の関係者、観客の皆様、審査員の皆様に心より感謝いたします。

二つ目の賞となる監督賞を受賞することは想像していなく、すごいことと驚いています。

私の作品を高く評価していただき、ほんとうにありがとうございます。

いつの日か日本を訪れ、皆さんにお会いし私の文化への気持ちをお伝えしたいです。皆さんを愛しています。

〈監督賞『ザ・ペンシル』のストーリー〉

この映画を観ると、いかにもロシアだ、という納得感を強く覚える。長いものには巻かれる、あきらめ、本音と建て前、帝政、搾取、農奴、ウオッカ、スターリン、プーチンなどロシアを語る言葉は多い。

ロシア北部の片田舎、連絡船が着く港近くに巨大な鉛筆工場があり、鉛筆の軸に使う木材がうす高く積まれている。その木材の谷間を縫うように、雨で泥んこの道が曲がりくねっている。



© Salt Studio, ©Fortissimo Films

多分この田舎町は、この鉛筆産業で成り立っているのではない。工場内は、大規模な鉛筆製造の流れ作業で活気があり、そこには地元のおばさんたちが大勢働いているが、男は殆どいない。

登校する生徒たちが行く早朝の泥道を、30歳くらいの美人が、スーツケースを持って歩いて来る。宿舎に着いたが、彼女の部屋は電気のない真っ暗な部屋。

彼女アントニーナは、サンクトペテルブルグからこの田舎にやって来たのだが、その理由は、彼女の夫が無実の政治犯で、この田舎町にある刑務所に入っており、面会ができるようにという配慮からだ。

そして彼女は、地元の学校(中学?)に、美術の教師として職を得た。ところが教室に入ると、生徒たちは、背の高い一人の男の子を恐れて、異様な雰囲気である。その生徒は、地元一番の凶暴ヤクザ者の弟で、その弟ヤクザを恐れて委縮しているのだ。

赴任したアントニーナ先生が、その弟ヤクザに注意しても、先生をバカにして無視している。

この異常な教室を何とかしなければと、教頭に相談するため部屋をノックすると、他の教師がそれを見て、教頭は屋前に帰宅してしまっ居ないよ、という。

彼女は、久しぶりに刑務所を訪ね、夫との面会を求めたが、すでに心臓発作で死亡



© Salt Studio, ©Fortissimo Films
美術の才能を見出されたチビッコ生徒ディマ

していた。

美術を教えるアントニーナ先生は、生徒の中から、特に美術の才能がある、少し太り気味の可愛らしいチビッコ生徒に注目していた。彼は先生が授業で見せるヨーロッパの名画に眼を輝かして見入っている。

学校では、彼女の提案で美術の展覧会を開くための準備をはじめたが、展示用の石膏の半面像などを運ぶ路上で、弟ヤクザに邪魔をされる。先生と共にいたチビッコ生徒が、石膏の半面像で弟ヤクザの頭を殴ってしまい、弟ヤクザは失神して入院騒ぎとなった。

それを聞いた兄貴ヤクザが、弟の復讐を準備していた。すぐにこの土地から逃げるようにとの知らせが届き、彼女は、才能を期待するチビッコ生徒に、パスポートを持って旅の支度をさせ、一緒に連れ出した。

木材谷間の道を通って、フェリー乗り場に急いだ。ところが、兄ヤクザが、回復した弟ヤクザを連れて追ってきて乱闘となる。兄ヤクザが、アントニーナ先生の頭を木材の角に叩き付けて、ダウンさせると、彼女のバッグから財布を取り出し、持ち逃げしようとする。

さすがにそれを見ていた弟ヤクザは、止めようとするが、兄貴は弟を引き連れて容赦なく引き上げる。

鉛筆工場の港を発ったフェリーの上には、離れ行く故郷を見守るチビッコ生徒ディマの後姿が…。これから美術を学ぼうという希望も感じさせる。

兄ヤクザにやられてダウンした先生は、どうしたのだろうか死んでしまったのだろうか…。

ここで、名セリフを紹介しよう。美術の授業をとおして、この村の因襲を変えようとする彼女に対して、同僚の男性教師が投げつける圧巻のセリフだ。

「この人間は、ここをクソだと思っている、快適なんだ、啓蒙なんて無駄さ、ロシアの歴史がいい例だ、理由を教えてやろうか。」

望んでいるものが違うんだ、連中が欲しいものは、ビールとサッカーと、パーベキューだ、週末のお出かけだ、それにくだらないテレビ番組。

ミケランジェロには興味はない、真実だよ、これが真実だ！連中の生き方に関わるな、距離を置け、さもないと悪魔が目を見

ます。君が食われるぞ！」。

一方、アントニーナ先生のセリフも興味深い。女性仲間との会話は、ごく自然で普通のおしゃべり言葉である。しかし、こと専門の美術の講義で、レオナルドダビンチ、ミケランジェロ、などを語る時は、まるで舞台の台詞のようで、専門的で、哲学を感じさせ、聴く者にとっては、まことに快感ですらある。

ナザロワ監督は、美術芸術について専門的な見識をお持ちなのだろうか。例年だと、スクリーン上映の後に、監督が登壇してQ&Aがあるのだが…。

『南スーダンの闇と光』：観客賞 (オーストラリア)



ベン・ローレンス監督 受賞の挨拶

『南スーダンの闇と光』が観客賞をいただき、映画祭、そして、観客の皆さんに感謝いたします。

滞在していたロンドンから発つ直前の、早朝の空港でこのニュースを聞き、とても驚いています。

ありがとうございました。さようなら。

〈観客賞『南スーダンの闇と光』ストーリー〉



© 2019 Hearts and Bones Films Pty Ltd, Spectrum Films Pty Ltd, Lemac Films (Australia) Pty Ltd, Create NSW and Screen Australia

今回の国際コンペ10作品のなかには、戦場カメラマンを主人公とする作品が2本並んだ。

1本は実写によるドキュメンタリー、もう1本が観客賞を受賞した、この『南スーダンの闇と光』で、こちらはドラマ仕立てである。

映画のトップシーンは、作品の主人公で戦場カメラマンのダンが、夜のイラクを取

材中、土手のような道の行く手に乗用車が止まっている。車はすべてのドアを両側に開いたままで通行を妨げている。

用心深く取材車を近くで止め、ダンはカメラを構えて車中を覗くと、座席には父娘のような人物が、のけ反って死んでいる。取材車のドライバーが、二人の持ち物を調べて、地元の議員だとわかる。

ふと、物音に気付くと、車の陰から髪の毛の長い少女が立ち上がった。取材をしようとダンが近づくと、土手の上に逃げてしまった。

大丈夫だ、そのまま！と声を掛けながら、少女に近付くと、土手の下に逃げてしまった。更に少女を探して追うと、ダンは足を滑らして転んでしまう。

取材車のドライバーが、地雷の敷設地帯だから止める！と注意すると、少し離れた方向から大きな地雷の爆発音、さっきの少女が地雷を踏んだのだろうか…。と、ここまでがこの映画のイントロダクションで、かなり期待をもたせる映像構成である。

ダンは自宅に帰り、久しぶりに妻の話を聞くと、妻は妊娠したとダンに伝えるが、彼は喜ぶどころか、心配そうで不機嫌な顔である。それはかつて妻が妊娠したときは、早産で死産だったので、習慣的に今度もそうなるのではないかと心配している。

そこに、見知らぬタクシードライバーのアーメッドが訪ねて来る。用件は、彼が南スーダンからの難民で、過去の苦しみを忘れようと、仲間とコーラスをやっている。戦場カメラマンのあなたに、コーラスの様子を撮ってほしいというものだ。

最初のうち、ダンは、自分の専門ではないので、別の仲間を紹介するなど、適当にあしらっていたが、これをきっかけに、お互い家族ぐるみの付き合いをする友人関係になる。

ダンは、撮り続けた戦場写真の作品を集めて、大きな展覧会を開催することが決まっており、色々と準備の段階であった。

一方、タクシードライバーのアーメッドは、戦場で妻と2男1女の子供を皆殺しにされた難民で、彼1人が生き残ったのであった。

展覧会の準備段階で、1枚の写真が、展示候補から外すかどうかの議論になった。黒人の男が、押し倒した敵の顔に拳銃を突きつけている写真で、あまりにもどぎつい

ということだ。

ところが、なんと奇遇なことに！その拳銃を突きつけている男が、タクシードライバーのアーメッドであることが判明した。

もちろん、カメラマンのダンは、そのような事は知る由もなく、現場で偶然その写真を撮ったのだ。

このような奇遇の出会いで、ダンとアーメッドは親友の付き合いとなり、共に展覧会の準備をすすめる。

ところが、アーメッドは、今の奥さんには、以前は家族持ちであったことを告げてなかったため、奥さんの怒りを買ひ、首つり自殺の未遂事件を起こす。これで、さすがに奥さんの怒りは収まったようだ。

念願の、ダン作品の展覧会は、大きな会場で開かれ、元気になったアーメッドの仲間たちも集まって、コーラスの披露があり、華やかな雰囲気の中で映画はハッピーエンドとなる。そこには赤ちゃんを抱いたダンカメラマンの奥さんが、幸せそうに立っていた。

『写真の女』:SKIP シティアワード(日本)



『写真の女』の串田史監督、SKIP シティアワードを大野元裕・県知事から手渡され、観客席から拍手。串田監督は、SKIP シティアワードは制作のサポートを得られる賞と聞きましたので、次回作は、映画の喜びを皆さんに届けられるものを撮りたいと思っています。と受賞の喜びと次回作への抱負を語った。

〈SKIP シティアワード『写真の女』のストーリー〉



©ピラミッドフィルム

この映画は、いわゆる一般的な商業映画の概念とは異なる、作家性の強い作品だ。

審査委員長の総評に「映画祭というものは、別の価値観から、純粋な映画を見せる

可能性を残している…」とあるように、この映画は、SKIP シティアワードに相応しい作品なのかもしれない。

観はじめると、これは筆者には理解が難しい作品かなと思ったのだが、先に進むうちに、ていねいな画作りと、堅実な撮影に興味を引かれるようになった。

ある地方都市の、あまり広くない道路に面して、木造の古びた商店ふうの家があり、ひっそりと写真館を営んでいる。大きなガラス戸の奥には、この写真館で撮った婚約や、肖像写真、七五三の記念などの作品が飾ってあり、一般の写真館と変わらない。

その店を営む主、械(かい)は、女性恐怖症で極端に寡黙な男だ、人と話をすることは絶対にない。彼は写真の修整が特技で、地元根付いた数人の得意客があり、肖像写真を撮ったり、持ち込まれた写真の顔を、客の希望通りに修正している。

昔と違って、今日ではデジタル修正のソフトを使うと写真を自由に修正することができる。変色して古びた写真の修復や、見合い写真の顔も自由に換えられるようだ。

眼をぱっちり大きくしたり、ほっぺたをへこましたり膨らませたり、顔を白くしたり、胸を大きくしたり、自由自在だ。依頼客を脇に座らせて、「目をもっと大きく」などの要望を聞きながら、その場で黙々と作業をする。その手元のアップが紹介され、マジックのような修正効果が面白い。

彼はプロのカメラマンでもある。ただし、被写体は昆虫である。一人で山に分け入り、昆虫を探して撮影するのが、趣味を兼ねた仕事だ。

そして彼は、自宅にカマキリを飼っており、餌を与えて観察するのが趣味のようだ。カマキリという昆虫は、子孫を残す営みを終えたら、オスはメスに食われてしまう運命にある。メスは、卵を産むための栄養を、オスを食べることで補っているのだ。

あるとき、山の入り口に軽ワゴン車を止めて、昆虫の被写体を探していると、木の枝に猿がいるような雰囲気を感じて、男が近寄ると、それはタイト姿の女だった。女は枝から降りて、男に近寄ると、その胸には大きな切り傷がある。彼女はその傷を隠すためにスカーフをたすき掛けにして、背中側を結ぶのを、男に手伝わせた。それが縁で、女はワゴン車に乗り込んで、写真館

の家まで入り込んできた。

男はすぐに彼女を撮影して、胸の大きな傷を得意の修正術で消してしまい、美しい写真に仕上げる。彼女はアクロバット風のポーズを得意とする写真モデルのようで、CMにも多く出ているらしい。

これをきっかけにして、女はこの店に居座ることになる。男の助手を務めたり、奥さん気取りで客にお茶を出したり、男と海や田園に同行して、男カメラマンのモデルを務めたりしている。

やがて彼女は、この女性恐怖症の男に積極的に近寄り、男女の営みを果たすが、男は相変わらず無表情で言葉を発しない。が、やや満足げにも見える。

終盤では、彼女がバレエを踊るために、飼っているカマキリを連れて、お気に入りの大きな鉄道駅広場に着く。そこで、飼いかマキリをベンチ後ろの植え込みに放すと、以前から住みついているカマキリと激しくもみ合い、男の飼いかマキリはすぐに食われ始めた。

なんと、これを見た寡黙の男が初めて言葉を発した。「メスに食われるオスだけが感じられるのだ、自分の存在によって、相手が生きているという喜びを…」。

女はこの駅前広場で、のびのびとバレエ白鳥の湖を踊りはじめると、踊る彼女を追いながら、狂ったように激写を続ける男。そこに「カマキリの共食い」ショットがカットバックで挿入される。彼は今までの寡黙男から脱皮したようにも見える。これがラストシーン。かなり観念的だが共感もできる映画だ。

この作品は、ほぼすべてのショットに三脚を使用してカメラを固定しており、シナリオの段階でカット割りの設計図が出来ていると思われる。三脚使用による安定した映像が、この静的で内向的な作品の品位を高めている。近頃の学生映画のように「手持ちカメラでなりゆき撮影」とは一線を画する作品だ。

串田監督は、次回作では、映画の喜びを皆さんに届けたいと、授賞の挨拶で言っておられる。柳の下の2匹めを狙わずに、大いに新しい「映画の喜び」を届けてほしい、期待している。

Syuichi Nakayama
日本映画テレビ技術協会名誉会員